

## ダニエル書

この書はバビロンがエルサレムに最初の襲撃をし 街と神殿を略奪し イスラエルの民を捕囚にした直 後の時代を描いています その中にはダビデ王家の血を引く 4人の少年がいました バビロンでベルテシャツアルと 名づけられたダニエル そして彼の友人のシャデラクメ シャクアベデネゴ 彼らはバビロンの名前のほうが 有名な3人です この書は彼らが征服者の国で どのようにして希望を保ち続けたのかを記しています

## ダニエル書の構成は一見シンプル

に見えます 1章から6章はダニエルとその友人たちについてのバビロンでの話 7章から12章はダニエルが見た未来についての幻です この2つのセクションには構成上の興味深い特徴があります それはこの書が書かれている言語です まずイスラエル民族の言葉であるヘブル語で始まるのですが 2章から7章はヘブル語の親戚のような言葉で 古代の国々の間で広く使われていたアラム語で書かれています そして8章から12章はまたヘブル語に戻っているのです これは2章から7章が独立したセクションであることを示すのと同時に このあとに続く章を理解するうえで重要であることを示しています では詳しく見ていきましょう

## 1章はこの書の前半のストーリー

の背景を紹介しています ダニエルとその友人たちは非常に賢く能力があり バビロンの宮殿で仕えるように召されます しかしユダヤ人としてのアイデンティティーを捨て トーラーにある食事の規定に違反して バビロン人と同じものを食べるように圧力をかけられます 彼らはそれを拒み トーラーに忠実であることを選んだためピンチに陥ります しかし神は彼らを救い出し 彼らはバビロンの王によって昇進させられました このあとからアラム語のセクションになるのですが これはシンメトリーのある見事

な構成になっています まずバビロンの王が夢を見ますが その意味を解釈できるのはダニエル だけでした それは4種類の金属で造られた巨大な 像の夢で 一連の王国を象徴していて頭の 部分はバビロンです ところが岩が飛んできてその像 を粉々に砕き その岩は大きな山になりました これはダニエル書に出てくるたく さんの象徴的な幻の最初のもので あとから出てくるすべての幻の 基本的なストーリーを紹介しています ダニエルは この像がバビロンに続く一連の王国 を表していると解き明かしました そのすべてが神が造られた世界を 暴力で満たします しかしいつの日か神の王国が彼ら の前に立ちはだかり 傲慢な国々をひれ伏させ正義をもって この世界を癒し 神の支配が行き渡るようにする と言ったのです このあと3章にはダニエルの3人の 友が 巨大な像を拜むことを拒んだ有名な 話が出てきます その像は2章に出てきた像のような 王とその帝国の力を象徴しています 3人は燃える炉の中に放り込まれ ますが神は彼らを救い出し この3人の神こそ真の神だと知った 王は彼らを称賛しました 次にバビロンの二人の王のストーリー が紹介されます 父であるネブカドネツアル王と 息子ベルシャツアル王です 2人とも帝国の巨大な権力に立つ 者として高ぶっていました そこで神はこの二人に2章の出来事 と同じように 夢と幻で警告を与えました これらもまた解き明かせるのは ダニエルだけでした ダニエルつつつ jは彼らに神の前にへりく だるように言いましたが 彼らは傲慢にも逆らいました そのためネブカドネツアルは狂 気に打たれ 野の獣のようになりましたが その後神に対してへりくだった ため 人間性を取り戻し再び王位につきました

これとは対照的に ベルシャツアルはへりくだることができませんでした そして警告されたその 日に暗殺 されたのです この二つの話は創世記1章と2章 また詩篇8篇で 人間が神のかたち

また世界の王として描かれている ことを思い出させます  
この世界の真の王である神は人間 にこの世の獣や鳥を  
神のために治める権威を授けました ところが人間が築いた王国がそれを  
忘れ神に反逆し 自分を神とする時には人間以下  
の凶暴な獣のようになり 神の裁きを招くことになるのです  
そして3章と対になっているのが6章です  
ここではダニエルが 王を神としてあがめることを拒否  
したために迫害されます そのため3人の友人たちと同じように  
死を宣告され ライオンのいる穴に放り込まれる  
のです しかし神はダニエルを獣から救  
い出し 王は神をほめたたえダニエルを  
称賛しました 次の7章は2章と対になっており  
この書のテーマが集約された中心 的な箇所です  
また夢の話ですが今度はダニエル 自身の夢です  
なぜか今回は彼にはその意味がわ からず  
御使いに説明してもらわなければ なりませんでした  
彼が見たのは4つの獣ですライオン のようなもの  
熊のようなもの翼のある豹のようなもの が出てきました  
これらは皆おごり高ぶった王国 を表しています  
そして最後に現れた恐ろしい獣 は非常に邪悪な帝国を表していて  
たくさんの角を持っていました これは旧約聖書に共通する王の  
象徴です そのうちある一本の角が生えて  
きましたが これは自分を神に勝るものとし  
神の民を迫害する傲慢な王を表 しています  
ここで人の子と呼ばれる存在が 登場しますが  
この人は神の民を象徴しながら 同時にダビデの血筋から生まれる  
彼らの王のことも象徴しています それから突然年を経た方という  
存在が現れ 王国を建てますそして恐ろしい  
獣を滅ぼし 人の子を雲の上に引き上げ神の  
右の座につかせ 共に国々を治めさせるのです  
ここでダニエル書の前半のおさ らいをしてみましょう  
迫害にも負けず信仰を貫いたダニエル たちの3つのストーリーは  
苦しみを受けているすべての神の 民に希望を与えるものです  
彼らは神に反逆し 獣のようになった人間の王国の  
ゆえに苦しめられました ですからこれらの幻は  
神がご自身の王国を建てて世界を 治め

神の民の苦しみを取り去ってくださるのを  
忍耐強く待つようにと励ましているのです  
ここで浮かび上がる疑問は 神はいつそれを成し遂げてくだ  
さるのかということです 最後の3つの幻がそれを探求して  
いきます 8章でダニエルはまた7章に出て  
きた最後の2つの獣の幻を見ます しかし今回はそれは雄羊の形を  
とっており メディアとペルシャを表してい  
ました 次にギリシャを示す山羊が現れ  
ますが この山羊から多くの角が生える  
中一つ一際大きな角が生え それは7章の邪悪な王を象徴している  
のです 彼はエルサレムを攻撃し自分を  
神より上のものとみなし 神殿に偶像を運び入れて冒涇します  
しかし最後には神は彼を滅ぼし ご自身の民と王国を高く上げて  
くださるのです 9章でダニエルはこれらのことが  
いつ起こるのかと気が気ではな く  
エレミヤ書を読みました そこには捕囚は70年しか続かない  
と書いてありました ダニエルにとって捕囚からもうすぐ  
70年が経っていたので 彼は神に早く約束を成就してくだ  
さるようにと願いました しかし御使いが現れ  
イスラエルの罪と反逆は今も続 いているので捕囚の期間は  
エレミヤに告げられた長さの7倍 になると言ったのです  
ダニエルは非常に動揺しました そして最後の幻を見たのです  
またもや王国に次ぐ王国です まずペルシャ次にギリシャとアレキサンダー  
大王 そしてその後も王たちが続いて  
います いずれも最終的にはエルサレム  
を侵略し神殿に偶像を設置し 自らを神の上に置く北の王につなが  
っていく流れです しかしこの王も突然滅ぼされる  
のです これらの幻の意味については  
今日も議論が尽きることはありません 多くの人は紀元前160年代のシリア  
の王である アンティオコスがしたことと明  
確な関連があると考えています 彼は多数の信仰深いユダヤ人を  
エルサレムで殺し 神殿に偶像を設置しました  
またこれは後のローマ帝国のイエス の死刑執行と  
西暦70年のエルサレム神殿の陥落 を指しているのだと  
考える人々もいます 更にイエスが再臨されるときに  
起こることを描いているのだと 考える人々もいます

しかし幻に出てくる象徴や数は いずれの解釈にも完全には合致  
しません それはつまり  
そのすべてが正しい可能性もある ということです  
ダニエル書はこのあとのすべての 世代の神の民に  
希望を与え続けているのです アンティオコスの時代もそのあと  
の時代もそうでした だからイエスはエルサレムで  
ダニエル書を引用しながら抑圧 者と対立したのです  
そしてまた黙示録を書いたヨハネ も  
ダニエルの幻を彼の時代のローマ にあてはめながら語り  
さらに未来のすべての抑圧者となる 国々にもあてはめました  
つまりダニエル書とはすべての 時代の読者が  
その中に似通ったパターンと 約束を見出すことができる書です  
そのパターンとは人間とその王国 が  
自分たちの力を誇り善悪の基準 を自分たちで決め  
神を真の王として認めようとしないう とき  
凶暴な獣のようになるということ です  
しかし同時にダニエルは 神がいつの日かご自身の王国をも  
たらすことによって 獣を打ち負かしご自分の民を救  
われると約束しています このようにこの書はすべての時代  
の人々に 神に誠実であり続けるようにと  
励ます 希望のメッセージを語っている  
のです これがダニエル書です

## 500 字要約

『ダニエル書』は、バビロンがエルサレムを襲撃し、都市と神殿を略奪してイスラエルの民を捕囚にした時代を描いています。ダビデ王家の血を引く 4 人の若者、特にバビロンでベルテシャザルと呼ばれたダニエルと彼の友人たちが中心的な役割を果たし、彼らが征服者の国で希望を保ち続ける様子が描かれています。

構成は前半がバビロンでの物語で、後半がダニエルが見た未来の幻に分かれています。言語の変化があり、ヘブル語からアラム語へと切り替わり、後に再びヘブル語に戻ります。これは構成上の特徴であり、章ごとの独立性と後続章の理解の鍵となります。

前半の背景では、ダニエルと友人たちがバビロンの宮殿で賢さと才能を発揮し、宗教的な課題に立ち向かう姿勢が描かれます。王の夢の解釈や友人たちの試練を通じて、彼らの信仰と

神への忠誠が試されます。また、バビロンの王たちの物語も続き、神に従う謙虚さと傲慢さの結末が示されます。

後半では、ダニエルが未来を見る幻が語られ、異なる帝国や象徴的な獣が登場します。これらの幻は解釈が分かれるが、神の民に希望と信仰を与え、神が世界を支配し、王国を建て、正義をもたらすことを予言しています。

疑問や未解明の部分も残りますが、ダニエル書は様々な時代の神の民に向けて、忍耐強く信仰を保ち、神の王国が訪れることへの希望を与えるメッセージを持つ書となっています。